(昭和四十六年寮歌

静 じま 朔なれる なに痛ない に手稲な 帰し遠汽笛 の 咆: 心哮絶えて

聳天樹の影は猛/蒼き光めりしる 凍てつく雪原に寒月の の射しそえば

くして

虚空指す彼方宿り舎のそらさかなたやどか 灯は今宵また旅人の

ぎ培いし迪を諭せり

北き 焼ゃ 0) けて南 都なっ に 属 の 起 た 世 ₹ つ間 か

ば

はろばろと続く沃野

の 玉葱ぎょ

雪き融ど け水の溢れては

豊うすい の岸塵高い

土の香ぞする野幌路をつちかかるのほろじ 黄^き ば む空気 一ゆく鳥 もな

孤りそぞろに辿る日 の旅を思い佗ぶかな は

> 延びる鉄路の 傍の の でっろ かたわら 金に輝く北指してきんかがやくきたさ

かの石狩り の文学碑 に

濁いれ む夏陽に涙する 唇年忘れずや .る川に臨みては

この地拓きし先人の夢 顧

伊藤正朗君 作歌 ・作曲